

第5回アフリカ開発会議(TICAD V)雑感

開発経済調査部 主任研究員 福田 幸正
fukuda@iima.or.jp

「躍動するアフリカと手を携えて」(Hand in Hand with a More Dynamic Africa)を基本メッセージとして、6月1日から横浜で開催された第5回アフリカ開発会議(TICAD V: Tokyo International Conference on African Development V)が3日間の日程を終えて6月3日閉幕した。TICADは冷戦終結直後に世界の関心がアフリカから離れる中、1993年に日本のイニシアティブで発足したアフリカの開発を幅広く協議する国際会議。日本政府が主導し、国連、アフリカ連合(AU)、国連開発計画(UNDP)、世界銀行と共同で開催。5年に一度の首脳級会議と閣僚級フォローアップ会議を開催している¹。

「強固で持続可能な経済」、「包摂的で強靱な社会」、及び「平和と安定」を促進するための一丸となった行動を通して「質の高い成長」を追求することが「横浜宣言 2013」として合意された。

また、これに対して、民間の対アフリカ貿易や投資を促進し、アフリカの成長を後押しする(インフラ、人材育成など)。日本らしい支援を通じ「人間の安全保障」を推進する(農業、保健、教育、平和と安定など)。そのために今後5年間で1兆4千億円のODAを含む最大3兆2千億円の官民の取り組みで支援する、というのが今回の日本の主なアフリカ支援策だ。

なお、ノーベル経済学者のジョセフ・スティグリッツ教授も特別ゲストとして全体会合やセミナーに参加し、反ワシントン・コンセンサスの立場から、日本をはじめとする東アジアの開発経験のアフリカへの適用を訴え、その面での日本の知的貢献に並々ならない期待を寄せていたのが印象的だった²。

TICAD Vは2012年10月の国際通貨基金(IMF)・世銀年次総会に引き続き、日本がホスト国を務める大規模国際会議。アフリカの39名の首脳を含むアフリカ51カ国、関係国、関係機関、民間セクター、NGOなど4,500人以上が参加した。今後数年は、こ

¹ TICAD V 外務省サイト (全体会合の様子を Ustream で見ることができる)
http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/page2_000016.html

² Joseph E. Stiglitz, *East Asia's Lessons for Africa*, Project Syndicate, June 3, 2013
<http://www.project-syndicate.org/commentary/east-asia-s-lessons-for-african-economic-development-by-joseph-e-stiglitz>

の種の日本ホストの大国際会議はなさそうだ。

それなら、と、ホスト国の一国民として、会議をもり立てたい気持ちも込めて幾つかの公式セミナーに参加し、会議の雰囲気を感じてみた。TICAD V では、2003 年以來の資源価格高騰に押し上げられ年率5%以上の高成長を続けるアフリカ側の自信が感じられた。また、アフリカ大陸で急速に存在感を高める中国をほのめかせて日本の対抗心をくすぐるような、アフリカ側の強かさも感じられた。これは同時に、オーバープレゼンス気味の中国に対するバルンサーとして日本を位置付けるというアフリカの高等戦術と受けとれないこともない。以下は、TICAD V 共同議長ハイレマリアム・エチオピア首相（AU 議長）の演説から気になる部分を抜粋したものである（著者抄訳）。（ ）内は著者の私見。

- 「・・・多くのアフリカの人々の生活を改善するため、日本自身が経済困難に直面しているにもかかわらず、日本は揺るぎなく多大の支援をしてきてくださったことに心からお礼申し上げます・・・」（大変ありがたいお言葉だが、日本の財政事情はアフリカにも心配されているのか）
- 「・・・日本のアフリカに対する投資レベルは、最近の活発な新規参入国に比べると、本来の姿とは程遠い・・・」（中国のプレゼンスとの対比をほのめかせたものと受け止められる）
- 「・・・日本のアフリカに対する支援がいかに寛大なものであったとしても、久しく存在感が希薄だった日本の民間投資家が本気になり、アフリカ大陸でそのプレゼンスが無視できないレベルにまで拡大しないのなら、今回の日本の支援の効果は半減するでしょう。」（これも中国のプレゼンスとの対比をほのめかした表現と受け止められる）
- 「・・・アフリカはビジネスに開放されています。私達の兄弟、日本の企業の皆様、ご安心ください。アフリカ・ビジネスは大変実り多いものとなるでしょう。アフリカに來たれ、そして投資を！アフリカの成長物語に参加されることを望みます。」（自信に満ちたアフリカ投資への誘い）
- こんな発言もあった。「・・・次回の TICAD までに（5 年後までに）安倍総理がアフリカを訪問することを期待します・・・」（これも、対アフリカ・トップ経済外交を頻繁に進める中国との対比と受け止められる）

アフリカ側に煽られるまでもなく、競争はアフリカにとっても、援助・投資する側にとってもよいことだ。質の高い援助、質の高い投資を競い合うということは、援助・投資する側は緊張感と知恵を絞ることを強いられることになり、それはひいては TICAD V が究極的に追求するアフリカの質の高い成長に繋がる。そして、最終的な評価者はあくまでもアフリカであることを忘れてはならない。

しかし、健全な競争と同時に、日中韓が中心となってアフリカで（アフリカ以外の地域、分野でも）協力ができればどれほど多くのことができることか。

それと同様の趣旨のことを、2012 年の IMF・世銀東京総会でのシンポジウムで韓国

系アメリカ人のキム世銀総裁はしみじみ吐露した。すると、すかさずアメリカ人のモデレーターは「残念ながら歴史はそうさせないことを実証してきた」とたたみかけた。

その他にも、TICAD V の全体会合の様子の録画を見ていて気がついたことがある。それは、アフリカ側の代表演説は概して場馴れしていないことだ。それでも、特に小国の演説に印象的なものが見受けられた。その中で、南部アフリカのある国の代表は次のような趣旨の発言で演説を締めくくっている。「これまで旧宗主国は我々を無視し続けてきた。一方、アフリカを植民地化しなかった日本はわが国のような小国の声に耳を傾けてくれただけでなく、我々のことを人として大切に扱ってくれた。日本、ありがとう」。他の多くのアフリカの国からも、TICAD を通して日本が世界の関心をアフリカに引き留め、アフリカと国際社会との懸け橋役を果たしてきたことを高く評価する発言が相次いだ。すなわち、アフリカは国際場裏で一人前扱いされず、また、発言の場さえ与えられず（したがって場馴れする機会も少なく）、悔しい思いをすることも多かったのだろう。TICAD の主役はアフリカであり、我々が想像する以上にアフリカにとって大切なフォーラムとして定着しているようだ。また、「開発の条件として民主主義やガバナンスもさることながら、高い倫理観が欠かせず、それはまさに日本が身をもって示してきた」という趣旨の発言もあった。これらが示すように、日本は我々自身が思っている以上にアフリカから評価され、感謝もされているのだ。そうであればこそ、「日本はTICADを日本の国益に利用する下心を持っている」などのそしりを受ける隙を作らないことが重要だ。

5年後の2018年に第6回アフリカ開発会議（TICAD VI）が開催される。3年に一度開催される中国アフリカ協力フォーラムや韓国アフリカフォーラムも奇しくも同じ2018年に開催が重なることになる。アフリカを巡り、日中韓の三つ巴はどうなっていくのだろうか。そしてその時、アフリカはどのような姿になっているのだろうか。

以上

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しく願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。

Copyright 2013 Institute for International Monetary Affairs (公益財団法人 国際通貨研究所)
All rights reserved. Except for brief quotations embodied in articles and reviews, no part of this publication may be reproduced in any form or by any means, including photocopy, without permission from the Institute for International Monetary Affairs.
Address: 3-2, Nihombashi Hongokucho 1-Chome, Chuo-ku, Tokyo 103-0021, Japan
Telephone: 81-3-3245-6934, Facsimile: 81-3-3231-5422
〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町 1-3-2
電話：03-3245-6934（代）ファックス：03-3231-5422
e-mail: admin@iima.or.jp
URL: <http://www.iima.or.jp>